

## 旧東ドイツのスパイ制度

### 国家保安省の I M

高 津 ド ロ テ ー

#### 1. はじめに

1989年の秋、旧東ドイツ（ドイツ民主共和国）体制が国民の圧力で崩れ始めた時、デモ参加者の大きな要求の一つは悪評の高い国家保安省（Ministerium für Staatssicherheit, ドイツ語の省略は Stasi, (シュターズィ) の解散であった。シュターズィは秘密警察と秘密情報機関を一つにした組織で、その存在は東ドイツ国内外に知られていたが、具体的な役割、そして実際の規模の大きさと行動形態は不明であった。シュターズィの倉庫が1989年の年末に開かれた時、初めて、東ドイツの人口1700万人の¼にあたる人々についての記録が見つかった。全部で600万冊の文書が記録され、その内の400万冊が東ドイツ人に関して、200万冊が外国人、主に旧西ドイツ(ドイツ連邦共和国) 人に関する文書であった (Kaiser 1991: 4)。つまり、シュターズィが国家のあらゆる機関、市民のあらゆる生活を全面的に監視していたことがわかった。

シュターズィの機密の行政方針 VVS Mfs 0016-902/85 (Vertrauliche Verschlusssache Ministerium für Staatssicherheit) の文書の中には、シュターズィの役割が次のように説明されていた：「政党（つまりドイツ社会主

義統一党 S E D = Sozialistische Einheitspartei Deutschlands) の指導の基に、シュターズィは固有の手段と方法を使い、他の国家机关および他の社会勢力による反政府、反体制運動の組織化、およびそれを目標としている活動に対する戦いを効果的に支援する」 (Leipziger Bürgerkomitee 1991: 55)。

1956年にシュターズィの局長に任命され最後までシュターズィを支配したミールケ国家保安大臣 (Minister für Staatssicherheit Erich Mielke) が目指した全面的な監視 (Flächendeckende Überwachung) は、シュターズィの正式な職員だけでは実現できなかった。そのためにシュターズィは一方で秘密なスパイ制度を作り上げた。このスパイ制度はシュターズィの職員ではなく、シュターズィと接触があった情報提供者、いわゆる I M (Inoffizieller Mitarbeiter) によって作られていた。シュターズィの浸透の広さ、深刻さ、そして人々に与えた影響は、今明らかになりつつあるが、シュターズィに表面的にわからないような情報を伝えた情報提供者 (I M) の協力がなかったら、それほど規模が可能にならなかったし、彼等の協力により、シュターズィの抑圧が効果的に機能した。要するにシュターズィにとってこの情報提供者 (I M) は一番効果的な武器であった。本稿では

情報提供者によるスパイ制度を取り上げ、それを解明する。

### 1.1. 概念の定義

ドイツ語では東ドイツの国家保安省が一般的にシュターズィと呼ばれ、それはドイツ語の正式名称 *Ministerium für Staatssicherheit* の省略である。日本語の文献では、書き方が「シュタージ」となっているが、ドイツ語の発音から言うと、「シュターズィ」の方が正しいのである。

シュターズィと協力した情報提供者は密告者(Spitzel)と呼ばれることが多いのだが、シュターズィでは情報提供者の正式名称は *Inoffizieller Mitarbeiter* 「非公式な協力者」であった。ドイツ語の省略 IM だけが正式な書類の中に使われているので、ここでも情報提供者には IM という略語を使うことにする。「非公式な」という意味は、IM がシュターズィに正式に雇われていたわけではなく、全員が別の仕事を持ち、経済的に独立していたからである。しかし、シュターズィが IM について詳しい調査記録を持ち、そして IM がシュターズィに要求されて情報を集めたという意味で、IM はシュターズィと深い接触を持っていた。

### 1.2. 本稿の資料文献

シュターズィは非常に官僚主義的な組織であったため、仕事のやり方に関しての行政命令や行政方針などが極端に多い。シュターズィの事務所の煙突から多くの資料を焼却している疑いを与える煙が出たのがきっかけで、1989年12月にシュターズィの地方の事務所、そして1990年1月15日にベルリンの本部がデモ隊により解散させられた。その直前まで、

シュターズィが必死で自分たちに不利な資料を燃やし、それは国家保安局の局長、シュワーンツ (Wolfgang Schwanitz, Chef des Amtes für Nationale Sicherheit) が1989年12月7日に全書類の焼却の命令を出した (Mitter 1992: 366) ためであった。この状況が研究を困難にしている。また、現在のところは残った書類の1/3程だけが整理された段階で、それだけが研究対象である。

本稿は、シュターズィの IM に対する扱い、IM の行動を最も詳しく説明している以下の四つの基本的な行政方針を資料として考察している：

- －Richtlinie Nr.1/79 für die Arbeit mit Inoffiziellen Mitarbeitern (IM) und Gesellschaftlichen Mitarbeitern für Sicherheit (GMS) (GVS MfS 0008-1/79) 「行政方針1/79、非公式な協力者 (IM) 及び保安のための社会的協力者 (GMS) との仕事のために」
- －Richtlinie Nr.1/82 zur Durchführung von Sicherheitsüberprüfungen (GVS MfS 0008-14/82) 「行政方針1/82、安全チェックの実行について」
- －Richtlinie Nr.1/81 über die Operative Personenkontrolle (OPK)(GVS MfS 0008-10/81) 「行政方針1/81、作戦上の人物コントロールに関して」
- －Richtlinie Nr.1/76 zur Entwicklung und Bearbeitung Operativer Vorgänge (OV) (GVS MfS 0008-100/76) 「作戦の実施計画と処理について」

以上 Gill / Schröter 1991から引用した。

なお、日本語による研究はまだ公刊されていないので、本稿ではドイツ語文献しか使われていない。

## 2. 歴史的な背景

敗戦後ドイツは連合国によって分離され、アメリカ、イギリス、そしてフランスの占領地は1949年に西ドイツとなり、そしてソ連の占領地は同じ年に東ドイツとして成立した。

東ドイツの政治はスターリン主義に基づき、社会のすべてに強い影響を与えた。共産主義の国家政党SEDはたった一つの政党として政治を支配した。1950年2月8日には国家保安省（シュターズィ）が独立した機関として創設され、SED政治局のみの管轄下におかれた（Weber 1980 : 54）。

当初のシュターズィの課題は、国家防衛であったが、時間がたつにつれて、シュターズィの優先的な役割は、さまざまな面で国内の国家に反対する活動、そして国を離れようとする人々の動きを早期にくい止めることに変わった（Gill/Schröter 1991 : 33）。

シュターズィの課題と権限は法律上で定義されていなかったため、シュターズィは早くからSEDの支配権と権力を行使する道具として利用された（Fricke 1992 : 46）。したがってシュターズィは国民全体に抑圧を与える機関となり、そしてどこまでも届く網のようにシュターズィのエージェントが公的私的な生活に浸透し、すべての批判を封じ込めた。

国の正式な考え方は、以下のようなものである。国家体制に対しての批判、反対の動きなどはすべて国外にいる敵からの影響であり、敵の目的は社会主義を排除することにある。敵がその目的を実現するため国内に浸透しているので、国民の全面的な監視が必要である（Gill/Schröter 1991 : 60）。つまり、SED権力者の全体主義的な思想パターンから離れ

ている考え方、行動などが帝国主義的な敵の影響であるため、全面的に撲滅しなければならない。その課題の原則的遂行は、

1. 人間なら誰にでも犯罪者の素質があるため、国の安全を脅かすリスクとなる。
2. したがって念の為に国民のすべてに関する情報が必要である。
3. 個人の権利よりも国家の保安の方が大切である（Leipziger Bürgerkomitee 1991: 53）。

時間とともに、東ドイツ内では社会主義の理想と現実にますますギャップが広がってきた、しかし、政府とSEDの指導者はその変化に合わせようともせず、逆にギャップが現れたからこそ、政党の路線を通そうとした。けっきょく政府とSEDの固定した社会像のため、現状を認めることができず、また、そのような変化の動向を恐れていた。

シュターズィが目指した全面的な監視には多くの人員と地方に至るまでの網の目のように張られた組織が必要であった。本部はベルリンにあり、そして各地区にも同じような組織が設立された。しかし、シュターズィに正式に雇われていた職員だけでは国民すべてのコントロールができなかったため、シュターズィは情報提供者（IM）によるスパイ制度を考え出した。

## 3. IMのスパイ制度

シュターズィにとって一番重要な情報源であったIMは、シュターズィが創設された当初から使われていたのであるが、IMのスパイ制度を作り上げたのは、1956年からシュターズィの局長であったミールケである。IMの扱い方と活動は多くの行政方針の中に定め

られ、その一番基本となっている詳しいものは行政方針1/79 (Gill/Schröter 1991 : 414-477)である。IMは東ドイツ外でも活躍したが、ここでは国内の活動のみ取り上げる。

行政方針1/79の前文には、「社会主義的な社会の発展は帝国主義との厳しい階級闘争とともに発展し、国家保安のためには敵への対策、そして政党と国の指導者が行ってきた政治の継続が必要であり、その中でIMは敵に対しての一番効果的な武器である」(416-417; 以下引用した数字はすべてGill/Schröter 1991のページ数を指す)と説明されている。1989年のシュターズィの解散の時に、東ドイツ全体にIMが浸透していたことが明らかになった(Aubel 1991 : 370)。およそ20-30万人のIMによって集められた情報は、東ドイツの人口全体の1/4にかかわるものであり、400万冊の文書のうちに記録されている(Kaiser 1991:4)。結局、IMの協力によりシュターズィの国民への全面的な監視が可能になったわけである。

### 3.1. IMの活動の目的と任務

IMの活動の基本的な目的は、「敵のすべての活動を撲滅するために、質の高い、証言力のある情報の入手を目標に、陰謀的に得る(konspirative Informationsgewinnung)ことにある。IMの使用は作戦上重要な情報提供(operativ bedeutsame Informationen)に集中される」(1.1.条、418)と行政方針1/79に説明されている。

シュターズィの作戦のために重要な情報とは国内活動に関しての次のような情報と証拠物件であった：

一政治体制に反対する地下運動の組織化の具体的な活動について

一国内の敵対人物との関係とそれらの具体的な目標と計画されている措置について  
 一市民のあからさまな扇動的な行動について  
 一特に責任の重い、指導的地位にいる人物の誤った行動及び否定的な考えについて  
 (1.1.条、419-421)などという内容であった。

この方針の意味は非常にあいまいであったので、シュターズィの都合のよいように解釈ができた。つまり、国家イデオロギーと政党の路線に合致しない考え方や行動は、すべて敵対的であると簡単に判断することができた。その上、シュターズィの行動を監督する機関がなかったため、シュターズィは思い通りに取りしめることができたのである。

IMのもう一つの任務は、社会的そして略的にシュターズィにとって作戦上必要な変化を起こすことにあった。(Herbeiführen von Veränderungen mit hoher gesellschaftlicher und politisch-operativer Nützlichkeit)。それは例えば：

一国内に起きている弊害を防止する予防対策をとる  
 一敵対人物(feindlich-negative Kräfte)の公的に効果がある活動  
 (öffentlichkeitswirksame Aktivitäten)を防止する  
 一敵対人物の影響を制約する  
 一敵対人物が所属するグループなどの分解、解体、(Zersetzen)それらに偽りの情報を与える(Desinformation)、活動を麻痺させ、そして撃滅する(Lähmen und Zerschlagen feindlicher Stellen und Kräfte)  
 (1.2.条、421-422)などのことであった。その方法に関してIMには積極的な行動が期待され、そしてIM指導者(FIM)と一緒に

計画が立てられた。

### 3.2. IMの種類

IMの多様な任務にはさまざまな要求があったため、IMのスパイ制度は次のような種類に分けられた。

#### 3.2.1. IMS

ドイツ語の正式名称は、IM zur politisch-operativen Durchdringung und Sicherung des Verantwortungsbereiches, IMS、「戦略的作戦上の浸透並びに責任範囲の保証のためのIM」(2.1.条、424-425)である。

IMSの基本的な課題は”Wer ist wer?”「誰が誰である」という質問を究明することであった。IMSは人数的に一番多く、そして彼らは公的生活、経済、学問、教会、文化、スポーツのどの分野の中にも浸透していた。したがってIMSによって国民の全面的な監視(flächendeckende Überwachung)が可能になったといえる(Gill/Schröter 1991: 101)。

IMSの活動は国内の状態だけを調べ、特にシュターズィの思想から見て政党の路線を逸脱する人についての情報提供であった。また、情報と同時にこのような人やグループにはどのようにシュターズィの解釈で「ふさわしい」影響を与えることができるかについても調べなければいけなかった。そのためにIMSの必要資格は、「社会的な地位、仕事などの条件を別にして、シュターズィとの安定した長い忠実な協力を保証できる政治的道義的な性格(charakterliche und politisch-moralische Eigenschaften)である。そのほかに、人とのつき合いが得意で、生活経験の深い、そして陰謀の秘密を守ることができる

(Wahrung der Konspiration und Geheimhaltung) (425) 人が求められていた。

#### 3.2.2. IMB

正式名称は、IM der Abwehr mit Feindverbindung bzw. zur unmittelbaren Bearbeitung im Verdacht der Feindtätigkeit stehender Personen;

IMB、「敵対関係を防止もしくは敵対活動をする疑いのある人について処理するIM」

(2.2条、426-428)である。ここで言う「処理」とは「秘密情報機関の方法を使って処理する」(Wawrzyn 1991: 35)という意味で、つまりシュターズィの独特な方法で監視することであった。

IMBの使用は大きく分けて二つの分野であった：

1. 敵の陰謀に浸透する  
(Eindringen in die Konspiration des Feindes)
2. 敵対活動をする疑いがある人の処理  
(Bearbeitung im Verdacht der Feindtätigkeit stehender Personen)

第1の内容は主に敵の活動を暴露することであり、そのためにIMBの資格について詳しく述べてある：

- －仕事上のフレキシビリティー、つまり、敵が関心を持っている仕事についていて、また幅広く移動できる人
- －シュターズィとの強い関係、絶対的な正直さ、ねばりつよさ、敵のイデオロギー的な圧力に耐えることが可能である人
- －判断力、一人でも政策的作戦的に正しい行動(politisch-operativ richtiges Handeln)をとれる人
- －個人的に敵と対面する時に、冷静でいら

れる人  
 ー政治体制についての詳しい知識を持つ人  
 (426)。

第2の内容は敵対的な活動をしていると思われる人の具体的な行動を調べること、それについての証拠を集めることと、その人との信用関係を利用しながら、なるべくそれを防止することであった。具体的に言うと、IMBは、シュターズィからみて政治路線に合致しない人について、彼らが犯罪を起したという証拠になる資料を集めた。その目標はそれらの人に対して裁判を起すことであった(Gill/Schröter 1991: 103)。

その第2の内容のためIMBに必要な資格は、すでに述べたこと以外に、以下の諸点がある。

- ー目標にされた人と目立たないように接触を取り、信頼関係を作ることができる人
- ー目標となっている人より、できれば才能の点で優れている人
- ー必要に応じての専門知識を持つ人(427)

### 3.2.3 FIM

IM zur Führung anderer IM und GMS (FIM)、「他のIMおよびGMS(Gesellschaftliche Mitarbeiter Sicherheit “の指導を行うIM」(2.3.条、428-429)。FIMは他のIMを指導する役割を持ち、すでに長い間IMとして活躍した人であり、スパイ制度の中での中心となった。FIMがIMによって集められた情報を判断し、IMの報告レポートをシュターズィの部局へ渡した。

FIMが行った指導とは、与えられたIMを効果的な仕事ができるようにトレーニングすることで、その中には彼らの思想教育も含まれていた。また合理的な仕事ができるため

に、必要と感じた時にはFIM自身が積極的に動き出すということも要求された。FIMはIMとしての長い経験を持ち、そしてシュターズィに信用され、シュターズィの思想も納得して身につけたため、自分の判断で行動もできた。

FIMは責任が重かったため、資格も詳しく調べられた。すでに述べた資格以外に特に、人の指導と教育の経験と力のある人が求められた(429)。つまり、人をシュターズィによって決められた目標へ向かって動かす力を持つ人がFIMとして選ばれた。

FIMに与えられたIMに関する資料は詳しく調べられ、両者には信頼関係が作られるように組み合わせられていた。二人または三人のIMが一人のFIMに属したが、IM同士はお互いの存在を知らず、それぞれFIMと1対1の関係で結ばれた。この1対1の関係、即ち、IMから見て友達関係が非常に効果的で、スパイ制度が成功した大きな理由となった。つまり、FIMはIMとの疑似友達関係を利用して情報を得たのである。

ところでIMは、同時に犯罪者と犠牲者であったことが明らかである。要するにIMはターゲットとなった人との信頼関係を使って情報を聞き出したのだが、それは人権侵害にあたり、同時にIM自身も同じようにFIMによって調べられ、利用されていたので、同じように人権とプライバシーが侵害されたからである。

### 3.2.4. IME

IM für einen besonderen Einsatz, IME (2.4.条、429-430)は「特定の任務を果たすIM」であり、次の三つの種類に分かれていた：

－IM in Schlüsselpositionen「重要な地位を占めるIM」

このIMは国家機関または、他の社会的な機関の中で重要な地位を持つ人で、自分の関係する機関についての情報を提供した。その他に、このIMはシュターズィが浸透できるように条件を作らなければいけなかった(Gill/Schröter 1991:105)。

－Experten-IM「専門家IM」

このIMはシュターズィから専門的な知識が求められ、頼まれた分野について鑑定書などを出したり、また、監視された人について自分の専門知識を報告した。

－IM-Beobachter「観察者のIM」

人を尾行または活動を観察するIM

### 3.2.5 IMK

IM zur Sicherung der Konspiration und des Verbindungswesens, IMK (2.5.条、430-431)は「シュターズィとの連絡と全面的な共謀を保証するためのIM」であった。このIMは自分の部屋、アパート、家または住所、電話などを決まった条件でシュターズィが使用できるように、またはIMとその指導者の密会のために提供した。

### 3.2.6 HIM

Hauptamtliche IM, HIM (2.6.条、431-432)は「本務のIM」で、他のIMと同じように別の仕事を持っていたが、シュターズィの指導でその仕事をやめ、情報を提供できる仕事へ移った。それが疑われないように、シュターズィがその人のために「作り話」(Legende)と見せかけの条件を作り、新しい職場へ入れたのである。普通は決められた期間中だけであって、その間にHIMは他のI

Mと違ってシュターズィから金銭的、社会的な援助を受けた。

この行政方針1/79には、各IMの仕事内容とそのために必要な人間的な資格が詳しく述べてあり、そして機密保持の必要性がいつも強く強調されていた(1.3.条、422-424)。そのためにIMは常にシュターズィによって、つまり別のIMによってチェックされ、そのチェックは本人だけでなく、家族と親戚までも含まれた(GVS-o017,3.1.7条、Pechmann/Vogel 1991:97)。彼等は、政略的そしてイデオロギー的教育も受けた。FIMは三年ごとにIMについて詳しい判断レポートを書いた。

### 3.2. IMの選定

シュターズィがIMに優先的に与えた任務は、スパイ的で非合法的な方法でしか集められない情報収集であった。正式なシュターズィの職員はそれができなかったからであった。

IMによって書かれたレポートはシュターズィの具体的な政策の基となったので、IMを選ぶ時には極端に入念な措置を取り、それも行政方針の中で非常に詳しく述べられている(4.条、447-458)。まずシュターズィに役に立つ専門知識を持つ人、シュターズィが決めたターゲットと簡単にコンタクトが取れる人、またはシュターズィにとって大切な情報を手に入れられる人が捜された。本人に声をかける前に、できるだけ細かい調査を行った(4.1.条、448-449)。

調査にはまず正式な決定が必要であるから、その決定記録に本人の名前などが具体的に記入されていた。したがって、この記録さえあれば、IMのアイデンティティがわかる。この調査は普通何か月もかかり、本人に関するすべてが、プライバシーに関することでも省

かずに調べられた。その時には警察、銀行、医者、職場などの他の機関からも協力を得た。このような調査にかけた膨大な時間、資金などを見ると、シュターズィの官僚主義と完全主義が明らかになる。

調査はIM候補者が適当であるかどうか为目的である。具体的な調査内容は、経歴、生活の仕方、仕事上および社会的な地位、過去と現在の友達関係、健康状態、家庭の事情である。

シュターズィはその人を信用できるかどうかを知るために以下の諸点を調べた。

- 社会に対する態度とその基になっている考え方、政治的な、宗教的な信念
  - シュターズィに対しての考え方
  - 「敵」に対しての考え方
  - 仕事上または社会的な義務に対しての考え方
- また、陰謀的な協力ができるかどうかを知るために以下の諸点を調べた。
- 現状の生活において協力が可能であるかどうか
  - シュターズィの陰謀の仕事に対しての考え方
  - 個人的な興味及び要求、そしてそれらと関連する物心両面の刺激
  - 引き受けざるをえない根拠があるかどうか

(Anknüpfungspunkte und Umstände für den Einsatz kompromittierenden Materials)

例えば：

- 法律違反
- 不当利益取得
- 規則違反
- 道義的、政治イデオロギー上の規則違反
- 醜聞

などのような事実

(4.2.条、449-451)

このような情報はIMを使って収集する。集められた情報の確実性も確かめなければならない。

特に前述の陰謀的協力(konspirative Zusammenarbeit)ができるかどうかの調査内容を見ると、シュターズィの徹底した措置が明確になるだけでなく、シュターズィの卑劣で官僚的な方法に驚かされる。また、引き受けざるをえないような情報を使うということは、シュターズィは選定する時に恐喝という手段も使ったことがわかる。つまり、シュターズィと協力しさえすれば、自分の過ちは明らかにされないということであった。選定したいIMに関しては決して成り行きにまかせない、そして、ためらいもなしに調べ、圧力をかけた。

この調査が終わった段階で、結果は細かい報告にまとめられ、選定を進めるかどうか判断された。調査結果が否定判断を受けた場合でも、報告と資料は処分されたわけではなく、また使う可能性があるということで、すべてが保管された。決定が肯定的であれば、接触の仕方を決めた。その方法は例えば、シュターズィが条件を作り、IM候補者に自分で連絡、または直接話しかけさせる、それでなければ、シュターズィの作った条件でシュターズィの部局へ出頭させるなどであった。実際の話し合いは非常に細かく計画され(4.2.2.条、451-453)、IM候補者の反応を見ながら選定を進めた。その途中でIMとしての協力が可能でないとわかった段階で接触を断絶した。

実際の選定の基盤は次の三つまたはその中の組み合わせとなった：



### 1. 社会的に肯定的な信念

この場合にはマルクス・レーニン主義信念から見た労働階級の権力の必要性、そして敵に対する学問的に確かなイメージを強調する。

### 2. 個人的な欲求

シュターズィとの協力によって候補者の個人的欲求が満たされる可能性があること。例えば金銭的な面、社会的な面、仕事の面などということに納得させる。

### 3. 引き受けざるをえない事実

このような資料を利用する場合は、本人の法令などの違反、またはその行為の責任から逃げるか、その罪をつぐなう気持ちを利用する。したがって、罪の意識と腐心を起こすことができるような資料を使わなければならない。利用の仕方は本人に合わせ、反応を見ながら行う（4.3. 条、453-457）。

要するに、シュターズィは選定のため、IMの協力が国のために必要であると理由をつけた、または人の弱点を利用したり、それとも圧力をかけたりした。相手がそれでも拒否した場合、シュターズィは告発すると脅かしたが、実際は告発を合法とする法律はなかった。

選定段階の最後にはIMは自分で仮名を選び、それをシュターズィとの接触に使った。その時点から自分の名前は一切使わなかった。その上、協力の内容は絶対に秘密であると強調された。この選定過程については、シュターズィの職員が詳しいレポートを書いた。その中に新しいIMの態度、決定の理由、決める方、反応なども含まれていた。

新しいIMの協力を得た後は、実際の態度をテストするために、しばらく簡単な命令を

与え、そしてずっとFIMを通して思想教育を続けた。その一部はFIMとIMの信頼関係作りであった。IMはたえまなくシュターズィによって監視され、そこからの解放は多大な個人的犠牲を払わないと不可能であった。

### 3.4. IMの利用方法

IMを最善に利用するためには、シュターズィが立てた計画を基に続けられた思想教育が非常に重要であった（3.1. 条、432-435）。そのやり方はIMの性格と特長に合わせて行なわれたが、教育の目的は、IMを完全にシュターズィの道具にすることであった。アメとムチを用いるようなやり方でIMを育成した。したがって、知らず知らずのうちにIMがシュターズィの犠牲となった。特にシュターズィが規定する「敵」から逆影響を受けないため、「敵に対する正確なイメージ」（433）を持つように注意した。そのためにはいつもIMの協力が国のため、社会主義の実現のためであるとし、そして「敵」の破壊力が強調された。そのうえ「敵」の活動であることが明らかでなくても、その「可能性」はいつでもあるとも教えられた（433）。つまり、そこでもシュターズィ独自の判断が基本となった。

また、IMの指導者（FIM）は心理的に非常に鋭い方法を選んだ。親しい関係を作り上げることによって信用させ、相談相手にもなって、その中でIMに対する教育を行った。したがって多くの場合には、シュターズィがねらっていた「無条件の一体感」（volle, rückhaltlose Identifikation）（434）を作り上げることに成功した。

IMは命令を渡される時、目的に関して最低必要な程度だけしか教えられず、場合によってはシュターズィの作り話（Legende）が教

えられた(3.2.条、437)。それはシュターズィに対して疑問が起きないように、信頼が疑われないように、また、シュターズィによって作り上げたイメージが守られるための措置であった。

I Mは自分の指導者(F I M)に詳しい報告を渡さなければならなかった。つまり情報の内容、集め方、陰謀方法、みつかる危険、総合的な判断などであった。F I Mはそれを基にし、そしてI Mの態度などを見ながら、次の仕事を与えた。

I M指導者(F I M)の大切な役割は、I Mのチェックであった。特にI Mに拒絶反応があるかどうか、もしあればその理由はどこにあるのか、どのように拒否しているのか、対策があるかどうかを見つけないければならなかった(3.4.条、438-440)。

I Mと指導者(F I M)とのミーティングは細かく計画され準備された。指導者(F I M)は必ずI Mより早く来て、陰謀の可能性を確かめた。指導者(F I M)は談話中にはいつも模範であるように努めなければならなかった。I Mから心配事項や悩みなどが述べられたら、いつでもうまく対応できるように努力しなければならなかった(3.5.条、440-443)。機密の行政方針WS JHS o001-19/86にはミーティングの準備、進め方、そのうえ後片付けに至るまで細かく定めてあった(Leipziger Bürgerkomitee 1991:177-178)。

各ミーティングの後にF I Mは詳しいレポートを書いた。その中には話し合いの内容だけでなく、I Mの心理的な、精神的な状態についても述べられている。少しでも疑問が起きそうな場合は、それに対しての対策までも考えた(Leipziger Bürgerkomitee 1991:167-170)。

F I MはI Mとの関係を絶つこともまれにはあった(3.9.条、446-447)。その理由は、I Mについて信用できなくなった場合、I Mが二重スパイであった場合、I Mが協力を固く断った場合、利用できる場所がなくなった場合、個人的な理由で協力ができなくなった場合などであった。

逆に仕事が成功した場合、シュターズィは業績の評価として賞金を与えた(Leipziger Bürgerkomitee 1991:169-170)。

### 3.5. I Mの仕事の内容

シュターズィは全面的な監視のためにさまざまな方法を使ったが、基本的には三つの段階に分けられる：

- －1. Sicherheitsüberprüfung「安全チェック」
- －2. Operative Personenkontrolle「作戦上の人物コントロール」
- －3. Operative Vorgänge「作戦の実施」

それぞれの段階について詳しい行政方針がある。

#### 3.5.1. Sicherheitsüberprüfung

##### 「安全チェック」

人の「安全チェック」はシュターズィの監視の一番低い段階であり、職場などである程度の責任をもつ人の全員に対して行った(Gill/Schröter 1991:124)。その「安全チェック」の行い方は詳しく方針1/82(GVS MfS 0008-14/82)に書かれてある(295-322)。目的は“Wer ist wer?”「誰が誰である」ということを明らかにすることであって、つまりシュターズィはターゲットについてなるべく多くの情報を求めた。「安全」の意味はシュターズィ及びそして国家にとって安全な人、要

するに国家に順応した人であった。

「安全チェック」の結果によってシュターズィはチェックされた人の将来などを決めた。例えば仕事を与えるかどうか、別の場所へ移すかどうかなどである。「決定の基準はあくまでも国と政党の政治である」(方針1/82、前掲書、298)。要するに個人の自由はまったくなかっただけでなく、国全体ではシュターズィに好ましい人だけに責任を持つポストを与えたといえるだろう。

「安全チェック」において常に調べたことは以下の諸点だった。

－国に対しての考え方

－国家、社会などにふさわしくない影響に対する態度

－敵がコンタクトを作りやすい生活を行っているかどうか

－ふさわしくない態度をしている人と接触があるかどうか (3.1条、301)

その上、必要に応じて具体的に詳しいチェックを行った。

「安全チェック」の場合のIMの役割は陰謀的方法でしか集められない情報収集であった(5.3.)。それは特に人のプライバシーに関連している情報を含んでいた。情報を集める方法は、ターゲットとの信頼関係を利用して情報を聞き取る、そして人の尾行、盗聴器の設置、盗みなどの違反的な方法も使われた。

### 3.5.2. Operative Personenkontrolle

#### 「作戦上の人物コントロール」

もっと具体的な疑問または必要性がある場合、シュターズィは「作戦上の人物コントロール」を行なった。それは方針1/81(GVS MfS 0008-10/81) (322-345) に書かれている。特に以下の三つのグループがシュターズィ

ィから人物コントロールのためにねらわれた：

－政治情勢に対して実行を起こす疑いのある人

－政治理念に合わない考え方を持つ人 (Personen mit feindlich-negativer Einstellung)

－国家的または社会的に重要な地位にいる人ではあるが、ふさわしくない意見を持つ疑いのある人 (1.条、324)

その上、作戦の目標では次のように書いている：「作戦上の人物コントロールは一般的には反逆的な行動－刑法上で有意味でなくても－を早めに見つけ、効果的に止めなければならない」(1.条、325)。一般的な前提は、具体的な根拠または容疑事実がすでにあることであった。

「作戦上の人物コントロール」の場合にもIMの協力が一番大切で、中心となった。特に職場で、そして私的な行動との接触についての情報は大切であった。しかし、情報収集だけでなく、ターゲットがふさわしくない行動ができないように、または、それを助ける条件を取り除くことも課題であった。特に「ターゲットとの信頼関係を通して解決しなければならない」(4.1.条、331)。また、ターゲットをすでに良く知っているIM、つまり、以前にもIMとしてその人について調べたことがある人が選ばれた。

「作戦上の人物コントロール」が終わった時、集められた資料の判断が行われた。最初にあった容疑事実が更に具体化された場合、「作戦の実施」が始められた。そこまでの調査結果が出なかった場合、しかしある程度の疑問が残った場合、シュターズィは対策を講じた。例えば職場でのポストを停止してしま

うなどであった。もう一つの可能性は、ターゲットがIMまたはシュターズィの正式な職員として利用するのにふさわしい人であると判断された時である。その場合はその人の選定調査が始められた。「作戦上の人物コントロール」の75%はまったく利用できない結果で終わってしまったにもかかわらず、集められた資料はすべて保管された(Gill/Schröter 1991:31)。

### 3.5.3. Operative Vorgänge

#### 「作戦の実施」

シュターズィがある人物に関して特別に興味を持った場合、第3の段階として「作戦の実施」を実行した。その基本方針は方針1/76、(GVS MfS 008-100/76) (346-402)であった。

「作戦の実施」はシュターズィにとって、内容的に一番細かく厳しい監視と追跡を必要としたため、IMの実際の行動が詳しく述べられている。しかし、「作戦の実施」を起こすには、つまりIMを実際に動かすまでは、シュターズィ内では長い準備過程を必要とした(1.条、350-373)。計画段階ではIMが情報収集のために使われた。

「作戦の実施」の目的は、特に「敵対的・否定的な動きを予防するため、そして政治理念を通させるためであった」(前掲書、349)。この『予防措置』はシュターズィに非常に大きな自由裁量の余地を与えた。

IMが準備のために集めなければならなかった情報は、一般的に次の内容についてであった。

- 敵が使っている手段、方法
- サポートしているメンバー
- その影響と成功について

- 可能にしている条件
- 敵どうしの接触方法
- 敵の行動

(1.2.条、353-357)

一番効果的と思われた手段はIMの「敵」との信頼関係であった(1.5.条、361)。IMは「敵」と十分に親しい関係になると、次のことを聞き出すように要求された。すなわちターゲットの職場と職場以外の行動、考え方、意見、発言、興味の内容、秘密情報、友人などとの人間関係、外国との関係、性格、政治に対しての態度などであった(361-362)。

この準備段階で集められた資料を基にして、具体的な作戦実施を行うかどうかが決められた。決定の基準は、「犯罪の疑い」があるかないか、つまりシュターズィの解釈で社会に危険な犯罪を起こす疑いがあるかどうかということであった。疑いがあるというのは、IMまたは他の方法(例えば郵便のチェック、電話の盗聴、住まいの中に仕掛けられた盗聴器など)で集められた情報を検討した上で、犯罪の可能性があれば、その人は犯罪の容疑者として認められた(1.8.2.条、370)。

具体的な行動に入るために、詳しい作戦計画が検討され、作り上げられた(2.2.条、374-375)。その中でIMが一番重要な意義があった。それは「IMは包括的に敵の共謀へ入り込む(Eindringen in die Konspiration des Feindes)ことができ、そして情報と証拠が得られる」(2.3.条、375)からであった。

このような仕事に選ばれるIMには高度な資格が要求された(2.3.2.、S.378)。例えば、ターゲットと仕事上、社会的な地位を利用して、または性格的に簡単にコンタクトが取れ、そして信頼関係が作れることが大切な前提であった。しかし、IMには最低必要な

ことしか教えなかった (383)。

次の段階はIMをターゲットと接触しやすいところ、情報を得やすい環境にセットすることであった。そのためにターゲットがIMを容易に信用するような「作り話」(Lengende)をシュターズィが選んで、それに必要な条件も作ってやった (2.4.1.条、385-386)。

「作戦の実施」の最終目的は、反対運動などを起こすグループの解散であった。特に使われた方法は「せんめつ作戦」(Zersetzungsmaßnahmen)であった (2.6.条、389-392)。このような作戦はグループ、組織または個人に対して行なわれた。その目標は敵の間に矛盾または摩擦を起こし、それによってグループなどが麻痺し、分離し、最終的につぶれてしまうことである。こうして敵対的な活動を止めることができる。すべてIMによって行なわれたが、その具体的なやり方は次のとおりであった。

- 事実と信じやすいウソ、しかしありえそうな情報を使って、計画的にターゲットの評判を落とす
- 職場や社会の中での不成功による自信の喪失
- 自分に対して、そして自分の信念について疑いを起こさせる
- グループの中に不信感を起こす
- グループ・メンバーの弱点を利用する
- 集会を不可能にする条件を作るなど (2.6.2.条、390-391)。

「作戦の実施の完了は国家の政治利害に役立たなければならぬ」(2.8.1.条、394) という目標から、シュターズィが人間の自由、発言権などを認めなかったことが明らかになる。すべてが国家理念に従わなければならなかった。

作戦の完了の仕方には、次の種類があった：

- 捜査手続きを始める、場合によっては本人を逮捕する
  - シュターズィの協力者として募集する
  - 中傷
- など (294-295)。選択の判断は効率の高さのみによった。

「作戦の実施」にシュターズィは全力を投入した。主なターゲットは政治的に反対を唱えるグループ、環境問題を取り上げるグループ、協会のメンバー、芸術家そして国を出ようとする人々であった。これらのグループのほとんどは、国の改善を目標にしていたが、シュターズィの固定した考え方では、ターゲットによるすべての活動の目的は国家の破壊であり、その原因は敵の影響であるとされた。政府とシュターズィの指導者は社会の中における変化を認めることができなかった上、それに合わせることも不可能であった。そのために、シュターズィによる国民の全面的なコントロールを廃止することも、考えられなかったのである。

#### 4. まとめ

東ドイツの国家保安省(シュターズィ)は秘密警察と秘密情報機関を一緒にした組織であったが、他の国のどの組織にも見られない特長を持っていた。それは情報提供者(IM)により綿密に案出されたスパイ制度であった。シュターズィが1950年に創設されてから1990年に解散されるまで、この制度は存続した。

シュターズィはSEDに直属し、国家の指導者と同様に、国民を社会主義の枠の中に入れ込み、政治理念を押し通そうとした。その

方法として、シュターズィはIMによるスパイ制度を効果的に使って、国民を全面的に監視した。

この意図の背景には、第二次世界大戦直後にスターリン主義が東ドイツに深く影響を与えたことがある。その特長は、「国の基本理念と異なる考え方を持っている人間は間違った考え方をしている」(Wilkening 1990: 123) というもので、そして、すべては敵である帝国主義国家の悪影響によるものということで、それらをつぶさなければならなかったとした。このような独裁的な環境の中で、シュターズィによる人間の尊厳を踏みつぶすようなスパイ制度が可能になったわけである。

東ドイツの40年間の歴史の中で、時々国民の不満が起こったが、国家はそれに対して強硬策をとった。1953年6月17日の労働者の反乱の武力での鎮圧および、1961年8月13日のベルリンの壁の建設は、その最も有名な例である。このように国民の現実と狂信的な国家指導者の現実離れした見解との間に、次第にギャップが広がってきたが、国の指導者はこのギャップに政策的に対応せず、非常に固定した考え方を持っていたため、官僚的にしか反応しなかった。つまり、国民の監視を更に強めただけであった。その関連でIMのスパイ制度は人員も内実も拡張され、シュターズィ解散の頃には「国全体がIMによって浸透された」(Aubel 1991: 370) 状況であったことが明らかになった。

シュターズィはIM制度を利用して、国内のすべてのことについて情報を求め、国民を全面的にコントロールした。その実践における監視には三つの段階があった。一番下のレベルはシュターズィの言い方に従えば「安全チェック」であった。この段階でIMは主に

シュターズィが選んだターゲットについての情報を集めた。集める方法としてはターゲットとの信頼関係を利用し、または尾行、盗聴器の設置、窃盗などの不法手段を使った。情報の内容はその人についてのプライバシーを含むすべてのことであった。

次のレベルは「作戦上の人物コントロール」で、これはシュターズィがもっと具体的な疑いをもち、それについてより詳しい情報を必要とした時に実行された。

この段階で集められた情報によって、疑いがもっと具体化された場合、シュターズィは実際の対策をとる次の段階に入った。それは「作戦の実施」であった。この段階では、シュターズィが対策を講ずるための情報を求めた。つまり客観的な情報よりも、ターゲットを有罪にできうる情報をIMから集めた。その材料をもとにして、シュターズィが具体的な措置として、グループまたは人の活動を不可能にしたり、逮捕し、裁判にかけたりして、人を裏から自分の都合の良いように、あやつり人形のごとく動かした。この段階でシュターズィはIMを、もっとも自分たちに都合よく利用したといえる。彼等のモットーは「目的はいかなる手段をも正当化する」であったに違いない。

それぞれの対策の中で、IMは最も重要な役割を持ち、シュターズィもIMを一番効果的な武器として利用したのであった。しかし非常に驚かされることは、この大切な役割を果たすIMがシュターズィの正式な職員ではなかったことである。すべてのIMは経済的に、金銭的にシュターズィから独立し、別の職業を持っていた。IMになるには、さまざまなプレッシャーがあったに違いないが、最終的にはIMの制度の基盤がボランティアで

あった。

効果的に情報を得るため、IMはさまざまな種類に分けられ、そして彼等の行動は官僚的に細かい行政方針によって決められていた。

この制度の中で、中心的な役割を果たしたのがIMの指導者（FIM）である。FIMはかつて長い間IMとして働き、成果をあげたため、シュターズィに信頼された人達であった。彼等は、一般のIMとシュターズィとの仲介者となった。つまり、FIMはシュターズィの思想と目標を自分のものにした人達で、自分に配属されたIMの思想教育のため、その思想と目標を使っただけであった。

FIMは原則としてIMと1対1で交際し、せいぜい2人か3人を受け持ち、それもお互いに知らないIMを指導した。このやり方は非常に効果的で、IMのスパイ制度が成功した主な理由となった。

IMが犯罪者であったことは明らかである。人にわからないようにプライバシーを犯したり、信頼関係を傷つけたり、場合によっては法律違反を起こしたりしたからである。特にFIMは基本的な人権を侵害した。

しかし、自分の意思ではなく、シュターズィの圧力でIMになった人達は、同時に犠牲者でもあったのである。なぜならIMになる前、シュターズィにより、つまり別のIMによって、プライバシーまで徹底的に調べられ、引き受けざるを得ない状況が作られた。そしてIMになった後、思想教育を受け、シュターズィの指図のもとに行動したのであるが、彼らの精神的な負担は非常に大きかった。自主的に、または強制的にIMになった人達は、その理由に関係なく、最終的にはすべてがシュターズィにとって使いやすい道具に育成された。

シュターズィのスパイ制度の存在そのものは知られていた。それゆえに国民全体の中に深い不信感が生れた。そのような状態の中でもシュターズィは作戦を効果的に遂行した。それを可能にしたのは次に挙げるような、いくつかの条件であった：

#### －スターリン主義の社会状況

国家の指導者は社会主義を実現しようと思ったが、元のスターリン主義から抜け出すことができなかった。

#### －あいまいな法律

東ドイツの法律は自由裁量の余地が非常に多かったため、シュターズィはこれを自分に都合よく解釈した。

#### －他の国家機関との協力

シュターズィの浸透によって、他の国家機関が協力せざるを得なかった。

#### －シュターズィの独自性

シュターズィは他の機関によってコントロールされず、報告する法的義務もなかった。

#### －完璧な組織化

全国に張りめぐらされたシュターズィの組織は、完璧な官僚制度の形態を取っていた。

#### －心理的、精神的な圧力

シュターズィは相手の心理面をつかんで、それを利用しながら、人をあやつり人形のように動かした。その上、シュターズィの存在から来る国民の精神的な恐怖もシュターズィにとって効果的に働いた。

シュターズィと国家の指導者が社会の変化さえ認めることができたなら、人間を蔑視するこの制度、特にIMというスパイ制度は必要なかったはずである。ほんの数人の指導者の狂信的な固定した考え方が、東ドイツという一つの国家の国民全体を苦しめたのである。

### Abstract

The spysystem in the former  
East Germany,  
the IM and the Ministry for  
State Security  
Dorothee Takatsu

The East German Ministry for State Security, the Stasi, was in existence for almost forty years. The effectiveness of their surveillance operation depended on the use of FIM, "unofficial officers" training and supervising IM, "unofficial co-workers", who thoroughly infiltrated the whole country. The most significant aspect of this system was that it was 'voluntary' in that there was no official recognition of the FIM or the IM, yet without them the Stasi could not have executed its control.

### 参考文献

AUBEL, Henning:

Erbe des Überwachungsstaates belastet politisches Klima (監視国家の遺産は政治的な環境の負担となっている) in: *Aktuell* '92, 1991, Harenberg Lexikon Verlag

BNDESZENTRALE FÜR POLITISCHE BILDUNG (編著):

Die Teilung Deutschlands 1955 bis zur Einheit (ドイツ分割-1955年から統一まで) Informationen zur politischen Bildung 233, 1991, Bonn

GAUCK, Joachim:

Die 'Stasi-Akten' (シュターズィ文書) 1991, Rowohlt Taschenbuchverlag GILL, GmbH David, SCHRÖTER, Ulrich: Das Ministerium

für Staatssicherheit (国家保安省) 1991, Rowohlt Berlin GmbH

FRICKE, Karl Wilhelm:

Die Geschichte der DDR: Ein Staat ohne Legitimität (東ドイツの歴史: 合法性のない国家) in: *Die Gestaltung der DEUTSCHEN EINHEIT* (ドイツ統一の形成) 1992, Bouvier Verlag Berlin, Bonn

KAISER, Carl-Christian:

Die Büchse der Pandora (パンドラの箱) in: *Die Zeit* 誌 Nr. 15, 12. April 1991, Leipziger Bürgerkomitee

ZUR AUFLÖSUNG DES MfF/AfNS:

Stasi intern (シュターズィの内部) 1991, Forum Verlag Leipzig

MITTER, Armin:

Die Aufarbeitung der DDR-Geschichte (東ドイツの歴史を考えて) in: 前掲書 *Die Gestaltung der DEUTSCHEN EINHEIT* (ドイツ統一の形成) 1992, Bouvier Verlag Bonn, Berlin

NAWROCKI, Joachim:

Die Opfer müssen lange warten (犠牲は長く待たなければならぬ) in: *Die Zeit* 誌 Nr. 17, 17. April 1992

PECHMANN, Roland VOGEL, Jürgen:

Abgesang der Stasi (シュターズィの最後) 1991, Steinweg Verlag Braunschweig

THEYSEN, Uwe:

Der Runde Tisch, Oder: Wo blieb das Volk? (円卓論議、または国民はどうなったか) 1990, Opladen

WAWRZYN, Lienhard:

Der Blaue: Das Spitzelsystem der DDR (青い人達: 東ドイツのスパイ制度) 1990, Verlag Klaus Wagenbach Berlin

WEBER, Klaus:

Kleine Geschichte der DDR (東ドイツ小史) 1980, Verlag Berend von Nottbeck Köln

WILKENING, Christina:

Staat im Staate (国家中の国家) 1990, Aufbau-Verlag Berlin Weimar

*Der Spiegel* 誌 Nr. 18, 1992: "Kampf um die Seele" (亡霊をめぐる戦い) Spiegel-Verlag Hamburg